

お増 政夫さん、何をそんなに考えているの。

語り お増が出し抜けに後からそういつて、近くへ寄つて

きた。僕がよい加減なことを一言二言いうと、お増はいきなり僕の手をとつて、

お増 も少しこつちへきてここへ腰を掛けなさいまア。

語り と言いつつ、藁わらを積んである所へ自分も腰をかけて僕にも掛けさせた。

お増 政夫さん……お民さんはほんとに可哀相でしたよ。

うちの姉さんたらほんとに意地曲りですからネ。何という根性の悪い人だか、私もはアこのうちに居るのは厭いやになってしまった。昨日政夫さんが来るのは解わかりきつて居るのに、姉さんがいろんなことを云つて、一昨日おとといお民さんを市川へ帰したんですよ。待つ人があるだつぺとか逢あいたい人が待ちどおかつぺとか、当あたりすりを云つてお民さんを泣かせたりしてネ、お母さんにも何でもいろんなこと言つたらしい、とうとう一昨日お昼前に帰してしまつたのです。政夫さんが一昨日きたら逢あわれたんですよ。政夫さん、私はお民さんが可哀相で可哀相でならないだよ。何だつてあなたが居なくなつてからはまるで泣きの涙で日を暮らして居るんだもの、政夫さんには手紙をやりたいけれど、それがよく自分には出来なから口惜くやしいと云つてネ。私の部屋へ三晩も硯すずりと紙を持ってきては泣いて居ました。お民さんも始まりは私にも隠ひそかしていたけれど、後のちには隠ひそかして居られなくなつたのさ。私もお民さんのためにいくら泣いたか知れない……。